

2022 年度第 1 四半期 決算報告

説明要旨

2022 年 7月28日

【説明会資料】

<https://www.zeon.co.jp/ir/financial/bs/pdf/220728.pdf>

【説明内容】 (取締役常務執行役員 曾根 芳之)

p. 2 2022 年度 Q1 (第 1 四半期) 総括とセグメントの概況

総括: Q1 連結実績は対前年同期で増収減益、対前期で増収増益。新型コロナウイルスによる調達、生産への影響はない。

エラストマー素材の概況は、原料価格高騰に伴い販売価格の改定が進み、QoQ は増収増益となるも、ラテックスの出荷減および価格鎮静化により YoY は増収減益。合成ゴムは主力工場の定期修繕に向けて、出荷量および在庫調整を実施している。

高機能材料の概況は、YoY・QoQ とともに増収、営業利益は QoQ で増益となるも、原料価格高騰の影響で YoY は減益。

p. 3 2022 年度 Q1 の事業環境 (為替・主原料推移)

為替は、対前年同期・対前期ともに US ドル、ユーロともに大きく円安に推移した。

ロシア・ウクライナ情勢の悪化及び円安の影響を受け、国産ナフサ価格は対前年同期比 1.8 倍と急騰。アジアブタジエンは、クラッカーの減産等で供給バランスがタイトになり、対前年同期比で 1.3 倍となった。

p. 5 2022 年度 Q1 業績サマリー (全体)

青色ハイライト部分が当期の実績である。

売上高は 976 億円、四半期で過去最高となった。対前年同期 104 億円の増収、対前期 46 億円増収。

営業利益 107 億円、対前年同期 31 億円の減益、対前期 27 億円の増益となった。

p. 6 2022 年度 Q1 業績サマリー (セグメント別)

売上高は、エラストマー素材 535 億円、高機能材料 301 億円と対前年同期・対前期ともに増収。

営業利益は、エラストマー素材 41 億円、高機能材料 70 億円と対前年同期で減益、対前期で増益。

対前年同期で増収減益となった理由は後半でご説明させていただく。

p. 8 エラストマー素材 概況

左のグラフは国産ナフサ価格とエラストマー素材の売上高の推移をお示ししている。

国産ナフサ価格上昇に伴い販売価格の改定が進むも、ラテックスの減収影響により全体としては売上高微増という結果となった。

右のグラフは 21 年度 Q1 の合成ゴム出荷量を 100 とした場合の出荷量推移を指数でお示ししている。22 年度 1Q の需要は堅調だったが主力工場の定期修繕に向けて出荷量の調整を行っており、対前年同期・対前期とも出荷量は減少した。

p. 9 エラストマー素材 P/L

こちらは、エラストマー素材セグメントにおける各事業の状況であり、出荷量は 21 年度 1Q の出荷量を 100 とした指数でお示ししている。

ラテックスの市場在庫過多の状況が継続、化成品の出荷減、合成ゴムの在庫調整も合わせて、エラストマー素材全体で、対前年同期・対前期ともに出荷量は減少した。売上高については前ページで触れており割愛させていただく。営業利益は次のページでご説明する。

p. 10 エラストマー素材事業：要因別 営業利益差異 (QoQ)

出荷減の影響で数量差は 2 億円の悪化。エラストマー素材事業は、いずれのセグメントも出荷量減となったが、合成ゴム・化成品で出荷品目構成の良化があり、数量差悪化は軽微となった。

また、原価差 38 億円の悪化に対し、販売価格の改定が進み、価格差 26 億円、為替差 17 億円の良化となり、原料価格高騰の影響はほぼ解消できている。

販管費は、海上運賃の上昇による悪化約 6 億円を含むが、Q4 に発生した修繕費と間接部門費用が減少したことにより 10 億円良化し、営業利益は合計 14 億円の良化となった。

p. 11 エラストマー素材事業：要因別 営業利益差異 (YoY)

こちらは、営業利益を対前年同期と比較したものであるが、対前期と傾向が異なるのは、販管費差が 20 億悪化して発生しているところだが、海上運賃の上昇が主因である。

p. 13 高機能材料の P/L

高機能樹脂、高機能ケミカルともに対前年同期、対前期とも売上高は増加した。光学樹脂の価格改定、中小型向け光学フィルムの出荷回復、電池材料および化学品香料の出荷増が主な要因である。

p. 14 高機能材料事業：要因別 営業利益差異 (QoQ)

化学品及び光学フィルムの出荷が堅調だったが、価格差は光学フィルムの品目構成差により、若干のマイナスとなった。また、棚卸資産関連費用約 5 億円の悪化を含む原価差の悪化 7 億円に対し、販管費差は新規開発費用や間接部門費用が減少したことにより 9 億円良化した。以上により、営業利益は合計 10 億円の良化となった。

p. 15 高機能材料事業：要因別 営業利益差異 (YoY)

こちらは、営業利益を対前年同期と比較したものである。原価差は約 7 億円の棚卸資産関連費用を含み 17 億円悪化した。光学樹脂・化学品の販売価格改定及び為替で約 16 億円良化し、営業利益への影響はなかった。しかし、海上運賃上昇、新規開発費用や間接部門費用が増加したことにより販管費差は 13 億円悪化した。以上により、営業利益は合計で 8 億円悪化となった。

p. 16 高機能ケミカル事業：電池材料の状況 (出荷量)

こちらは、電池材料の出荷量を対前年同期、対前期と比較したものを示している。

EV 向けは対前年同期 135%、対前期 106%と堅調。四半期では、中国ロックダウンや LIB 原料の価格高騰等の影響を一部受けるも、中国の EV 補助金等の支援策もあり、5 月以降に EV 生産は急速に回復している。

民生他用は、家電およびモバイル端末向けの需要一巡による一服感継続しており、出荷減となった。

p. 17 高機能樹脂事業：光学樹脂の状況 (出荷量)

光学用途向けは、セキュリティカメラ向け需要が堅調だったが、スマホ・プリンター共に Covid-19 および半導体不足影響により顧客の稼働が落ち込み出荷減となった。

医療、その他向けは、プレフィルドシリンジ等医療包装容器及び半導体用途で需要堅調で対前年同期で出荷増となった。対前期で出荷減となっているが、21年Q4にQ3以前の発注分をまとめ出荷したことが影響しており、堅調な動向に変化はない。

p. 18 高機能樹脂事業：光学フィルムの状況（出荷量）

中小型向けは、スマホ用途において次期モデル向け生産回復により出荷増となった。タブレット・ノートPC向けもQ1は堅調も、不確定要素であった教育関連の需要についてQ2以降で一服の兆しが見込まれる。

大型向けは、ディスプレイの大型化により面積で市場成長しているものの巣籠特需の反動による世界のテレビ販売鈍化による市場でパネル在庫の調整が行われており、出荷はほぼ横ばいとなった。この傾向はQ2まで継続し、秋のサッカーワールドカップ、年末商戦に向けたQ3の回復を見込む。

当社から見た用途別の市場動向については、参考資料に掲載しているのでご確認いただきたい。

p. 20 B/S 概要

こちらは貸借対照表の概要である。

総資産は、定期修繕を控えエラストマー素材製品の在庫積み増しによる棚卸資産の増加、価格改定による債権の増加を中心に134億円増加し、4,981億円になった。こちらに、原料価格高騰による買入債務の増加、社債の償還を差し引き、純資産は62億円の増加となった。

p. 21 C/F 概要

財務キャッシュフローが大きく増えているが、内容は、社債償還▲100億円、自己株取得▲40億円、配当▲32億円等である。結果として、フリーキャッシュフロー10億円、トータルキャッシュフローは▲173億円となった。

p. 23 2022年度上期 事業環境

こちらは、4月27日に発表した上期業績予想に対する本日時点での着地予想である。

当初業績予想に対してエラストマー素材は上振れ、高機能材料は下振れを見込んでいるが、全体では当初予想通り売上高1,990億円、営業利益215億円の着地を想定している。

各セグメントの詳細はコメント欄に記載のようにセグメント毎の動向にバラつきが出ている状況である。

p. 24 2022年度 業績予想

以上により、上期業績予想は直近の為替・原料価格の値に修正した場合も、円安及び原料高による価格改定のプラス要因と当初想定より出荷減が起きているセグメント動向のマイナス要因が相殺されると想定し、上期予想値は据え置きとし、下期は市場環境の不透明感が増している状況から慎重に精査を継続しており、現時点での見直しは行わず、結果として22年度業績予想は当初予想を据え置く。

p. 25 2022年度 配当金予想

配当金についても、当初予想の中間期末18円、期末18円の36円を据え置く。

以上